

空間的位置とランドマークの関係

津 川 康 雄

The Relationship between Spatial Sites and Landmarks

Yasuo TSUGAWA

Summary

One can find throughout the world various spatial sites, which have to come to take on certain meanings as a result of human activities or interactions. One of those examples is the Greenwich Astronomical, which is the standard for meridian and world standard time (Greenwich (Mean) Time). Another example is the Akashi Astronomy Science Museum in Japan. It is too important to ignore for it is the geographical points of Japanese standard time, which is the base of our living. Both are geographical points, which have taken on additional meaning as a reference to time and space for modern society.

In deliberate formation or reconstruction of the cities, there are many examples in which the roads are devised and the proper landmarks are located to help people's concept or comprehension of space consciousness. In Kyoto back in 794A.D., under Jyobou-sei, the roads were constructed in a checkerboard fashion, laying from east to west and north to south. Kyoto nowadays, such street names are still important for the recognition of the space for residents of Kyoto.

Thus, symbolic buildings and landmarks are built to support our spatial sense and to help locate places accurately. The fundamental characteristics of landmarks located abstractly on spatial coordinates are the natural and cultural element supported by abstract, symbolic, spatial, and acknowledged features.

In this thesis, I will discuss the relationship between Spatial Sites and Landmarks. The formation of Sapporo City in Hokkaido where accurate standard and some symbolic space had been located in the process of city construction will be referred to as an example. As a result, Sapporo came to have

its city formation in which Odori Park as an abscissa, Sosei River as an ordinate and Sapporo TV Tower at the centre. It is clear that Spatial Sites have been identified and located as a necessity for the residents of surrounding communities.

In other words, important points were formed as a result of causes formed throughout people's various decision making, necessity and coincidence happened in a certain period of time.

- . はじめに
- . 札幌の都市構造とその形成過程
 - a . 歴史的経緯
 - b . 計画的街区形成
- . テレビ塔建設とその経緯
 - a . 建設の経緯
 - b . テクノランドマークとシンボル
- . 空間的位置とランドマーク
 - a . 大通（公園）の景観と機能の変遷
 - b . 空間的位置とランドマーク
- . おわりに

. はじめに

我々は地球上（地表面）において、人間の諸活動に規定され、何らかの意味が付加された空間的位置（座標）を見いだすことができる。例えばイギリスの旧グリニッジ天文台は子午線（ 0° ）と世界標準時の基準として設定され、日本の明石（天文科学館）は日本標準時を示す経線（ 135° E）として我々の時空間認識にとって欠かすことのできない存在となっている。言い換えれば、両者は地球上の時空間認識の基準としての意味が付加された地点に他ならない。時間は太陽時で把握されることから、両者とも位置設定に天文関係の施設が用いられたのであろう。

自然的ランドマークの代表例である山は、山名に方位（東西南北）を用いてその位置を示したり、前後左右を冠して相互の位置関係を明確化することも多い¹⁾。これらは、山を地理的空間に配置し、認識してきた結果である。例えば北アルプスの穂高連峰では前穂高、奥穂高、北穂高、西穂高などと名付けられ、相互の位置関係が示されている。

都市が計画的に建設されたり改造される際、街路形態に工夫を凝らし適切なランドマークを配して、人々の空間認識を補助する例も多々認められる。例えばフランスのパリは中央集権的な王朝・国家の首都として発展してきたが、その基礎はセーヌ川の中州であるシテ島で、その後、囲郭都市

として展開していった。現在でもノートルダム寺院前の広場には里程原標が置かれ、区の数字が市街地周辺に向かって増えていくことは良く知られている。パリの人口増加は周辺部の拡大へと結びつき、数度の都市改造により囲郭部分が取り払われ、放射環状路型の街路形態が整備された。放射状街路が集まる地点（ノード）には広場やロータリーが設けられ、モニュメントや噴水などが配置された。シャルル・ド・ゴール（エトワール）広場にはナポレオンの凱旋門、そこからシャンゼリゼ通りを通過し、コンコルド広場に至るとエジプトから運ばれたオベリスクが置かれるなど、ともすれば方向感覚を喪失しやすい放射状街路に空間的なアクセントがつけられている。

また、京都は794年の平安京遷都にあたり、条坊制のもとに内裏を中心に朱雀大路が設けられ、東西・南北の街路が計画的に配置された。現在でも京都の中心部において、東西方向に延びる条名は人々の位置確認に欠かすことができないものである²⁾。

江戸時代では江戸と地方を結ぶために整備された五街道が参勤交代を始め、人々や物資の交流を促進した。街道には本陣・脇本陣、宿場、関所などが設けられ、ほぼ一定の間隔で一里塚（約4km）が配置された。一里塚は土が盛られ、通行者の注意を引くように樺などの樹木が植えられた。街道が分岐する追分けなどでは灯笼、石碑などによって位置の確認や方向感が喚起された。

このように、我々の空間的な行動・活動を支え、位置を明確化するために空間的なアクセントとして、シンボリックな構造物やランドマークが配置されてきたのである³⁾。ランドマークの基本的な特性は地理的空間における自然的・人文的景観構成要素であり、象徴性・記号性・場所性・認知性などの諸特性によって支えられ、人々の空間的座標軸に象徴的に位置づけられる存在である^{4・5・6・7)}。

本稿では、人間の諸活動によって空間に何らかの意味が生じる地点とランドマークとの関係を考察することにしたい。そこには、時間の経過やその間に様々な意思決定がなされ、必然・偶然の所産のもとで、結果的に空間認識を行う際の重要な場（地点）が形成されると考えられるのである。こうした意味のある場（地点）に、シンボリックなモニュメントやランドマークが配される傾向が強いものと言えよう。そこで、一例として北海道の札幌市を取り上げ、都市形成の過程において空間的認識軸が形成され、明瞭な基準点が生じたことや、そこにランドマークが配置されることによって、都市の内部にシンボリックな空間が形成されたことについて言及してみたい。

．札幌の都市構造とその形成過程

a．歴史的経緯

札幌は石狩川の支流である豊平川の扇状地に開かれた都市である。札幌の都市建設は、開拓使が置かれ、判官として任命された佐賀藩士の島義勇^{よしたけ}によって明治2年（1869）に始められたとされる⁸⁾。すなわち、開拓の本府として行政機能が卓越する基礎が築かれ、官依存の都市建設が実行されることになった⁹⁾。この計画は挫折に終わったが、明治4年に札幌に赴任した岩村通俊判官^{みちとし}は西村貞陽^{さだあき}

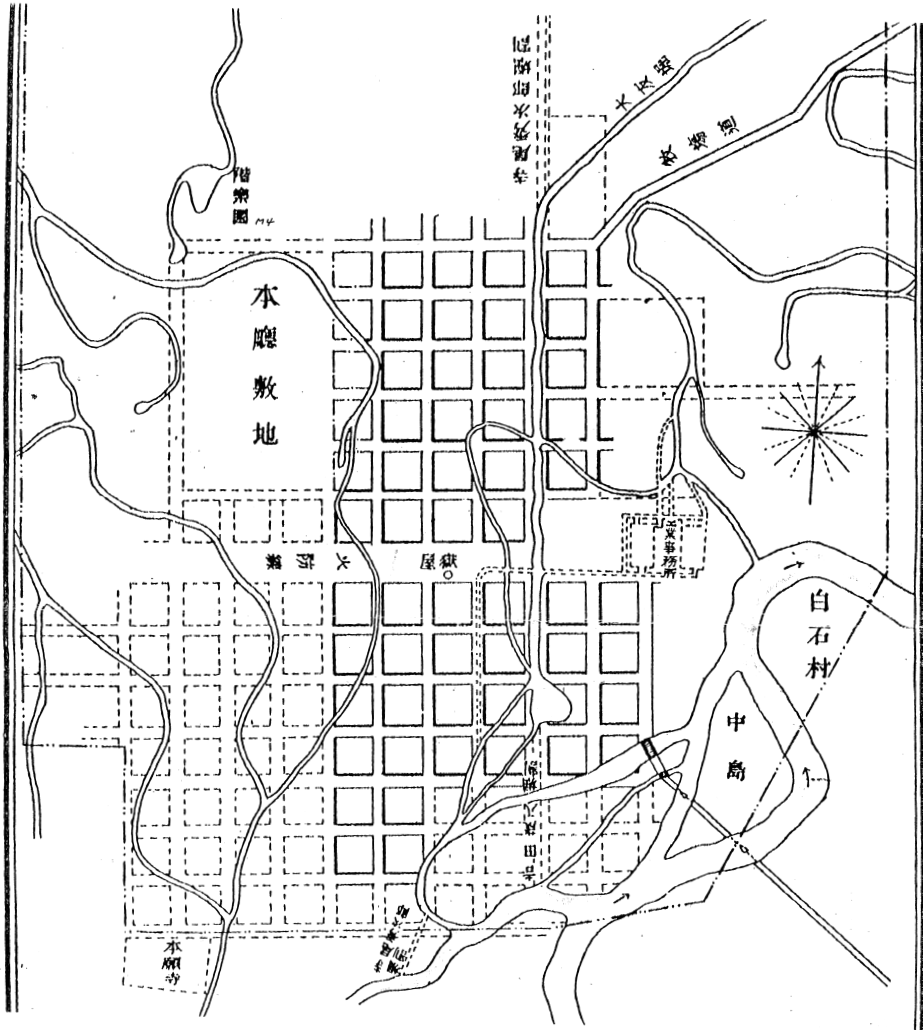
権知事と共に、碁盤目状の市街区画を施し、開拓使庁舎や官邸・役所の建設を開始した^{10・11}。しかし、岩村は開拓使の予算を顧みず建設を実行したため、同5年の札幌会議で黒田清隆開拓次官と対立し解任された。こうして、札幌の都市基盤が確立されていく訳だが、内陸のこの地に都市建設がなされる基礎的条件が認められる。すなわち、安政4年（1847）に蝦夷地を踏査し、札幌に本府建設を提言したことで知られる松浦武四郎によって、銭函 - 札幌 - 千歳を切り開いて日本海側と太平洋側とを連絡する札幌新道がつくられ、又、後の創成川に部分的に引き継がれる大友亀太郎が開削した大友堀を水運に利用できたことなど、すでに基本的な交通・輸送条件が整っていたのである¹²）。

開拓使は札幌を北海道の開発拠点とし、殖産興業を強力に進める政策を実行していった。その先頭に立ち、開拓使次官・長官としてその任にあたったのが黒田清隆である。黒田は札幌に製糸所、麦酒醸造所などの工場建設を推進し、先進国の技術や知識の導入を図るため、多くのお雇い外国人を招聘したことで知られている。彼らは生活・文化面において札幌に新たな側面を加えていった。明治8年には最初の屯田兵が琴似に入植するなど周辺部の開発も始まり、同9年には山鼻、発寒の屯田兵村が形成された。開拓使の廃止後、札幌・函館・根室の三県が設置され、同19年に三県廃止と共に北海道庁が置かれ、札幌の中心性がより一層高まった。とは言え、経済的には函館や小樽などの港町が海陸の接点としてのゲートウェイ都市的性格を保持していたことから札幌を凌いでいた。

明治14年には札幌市街の名称が条丁目に改められた。方格状の街区・街路形態に明確な基準が設けられたのである。さらに、同30年には支庁制度が導入され、現在とほぼ類似の行政機構が成立し、郵便電話局、税務管理局など、全道を統括する諸官庁も設置され、札幌の地域中心性がより一層高まった。同44年には大通火防帯に公園設備が加えられ、大通道逢地（現大通公園）ができています。

大正11年（1922）の市制施行以降、周辺町村を次々に編入・合併し、その面積・人口の規模を拡大していった。昭和に入り、第2次世界大戦後に札幌は北海道の拠点都市としての機能を一段と高めていく。すなわち、国土総合開発の実施に当たり、北海道開発局などの新設の機関をはじめ、中央官庁の出先機関が増設されたのである¹³）。それに伴い、金融機関や大手デパートの進出など経済基盤が充実していった。

昭和47年（1972）には政令指定都市となり、中央・東・西・南・北・白石・豊平の7区が設定された。ちなみに、同年に冬季オリンピックが開催され、各種競技施設と共に地下鉄南北線などが整備されている。平成12年7月の人口は181.9万人を超え、全11区を数えており、全国では東京（特別区）を除く政令指定都市中、横浜、大阪、名古屋に次ぐ第4位の人口、市域面積（1,121.12km²）は第1位となっている。このように、札幌は厳しい冬季の自然条件にもかかわらず、180万人を超える人口規模を有する都市へと成長した。それは、東京を頂点とする日本の都市システムの一部を担う広域中心性に支えられ、北海道の行政・経済そして文化の拠点となったことがその要因と考えられる。



第1図 明治4・5年の札幌市街図
 (『札幌市史 明治編』)

b. 計画的街区形成

札幌の中心部は鳥義勇^{よしたけ}の描いた指図をもとに、明治4年(1871)に赴任した岩村通俊^{みちとし}判官により、明確な碁盤目状街路が設定された(第1図)。基点は創成橋に置かれた。創成橋は創成川と南一条通が交差する所であった。したがって、その後、札幌都市建設の基点は創成橋ということになった¹⁴⁾。そして、分離帯(火防線)として位置づけられ、東西に延びる現大通(公園)を中心に、北を官衙地区、南を商家地区とした。東西の基準は創成川(大友堀の一部を直線化)を境とし、東は一部を官営の工場地区として地域区分された。なお、明治8年の札幌市街図(北海道史「附録-地図」)によると、北の官衙地区には開拓使庁舎、電信、第一學校、札幌學校、偕楽園などが位置しているが、整然とした街区が形成されてはいるものの、施設配置はまばらである。東は工作場、製糸所などが

立地しているが、創成川沿いに僅かに認められるにすぎず、その開発の遅れは否めない。創成川が自然の障壁として東西間に位置したこともその一因と考えられる。それに比べると火防線の南は商家地区として開発されたことから、すでに街区を横断する形で東西の中通りが形成され、商売の便を考え、商家が通りに面して配置される街路形態が形成されている。また、^{すすきの}薄野の遊郭がほぼ正方形に4つの街区を取り囲むように形成されている。全体に商家地区としての位置づけが成されてはいるものの、札幌女学校、市會所、郵便局、仮官邸などの記載も見られることから、必ずしも土地利用が純化したものとは言えない。こうして全体的な地域構造・土地利用配置が決定された。当初は町名及び道路名を石狩通、空知通、渡島通などのように北海道の国郡名を当てはめたようだが、住民に深く浸透しなかった。いずれにしても、中心部の街区の形態や地区の土地利用は、大通りを境に北の官庁街、東の工業地区、南の商業地など、現在でもその継続性を少なからず確認することができる。もちろん、通りの持つ意味の変化などは認められる。とくに、明治13年に札幌～手宮（小樽）間に開通した鉄道及び鉄道駅の設置は、駅と大通を結ぶ南北方向の道路がメインストリート化するきっかけを与えるなど、時の流れが反映されている。

明治14年に、札幌の碁盤目状街路区画に新たな呼称が用いられることになった。それが、条丁目の採用である。大通を中心に北一条～六条、南一条～七条、創成川を挟んで東西の丁目が施され、中心部の区画が碁盤目状に整備された。その結果、東西に延びる大通と創成川の交点が条丁目座標の原点となったのである。言い換えると、必然的に条丁目座標は四分方位座標と一致し、規則的な方位によって中心地域の空間認識が可能になったのである。先にも述べたように、札幌建設の基点は南一条と創成川の交点である創成橋だが、条丁目の採用後、その地点から北に一条上った地点が座標の原点となった。

とは言え、必ずしも札幌の市街地が中心市街地の街区・街路を規則正しく踏襲した訳ではない。例えば、札幌の中心部に近い山鼻屯田兵村の場合、開拓使によって区画された街区・街路と僅かながら食い違っており、開拓使当局と山鼻屯田兵村との意思疎通の欠如が指摘されている¹⁵⁾。また、第2次世界大戦後の急激な人口増加は、札幌の都市化・郊外化に拍車をかけ、新市街地の形成が進行した。その結果、基準となる道路の方向が中心部と異なり、街区・街路の形成がその地域の特性に合わせた形で進められるなど、条丁目のみで地域認識が可能とは言えない状況になっている。規則的な街区・街路形態を成す札幌の中心部だが、メインストリートの変遷など通りの持つイメージは大きく変化している。

また、札幌の都市構造を考える上で、時代の経過が都市軸の変化へと結びついたり、その意味を変化させるなどしている。例えば、札幌駅から延びる西四丁目の通りは、大通（公園）を越え、南一条で交差する。戦後、道路が拡幅され、その周辺は札幌の中心商業地区の一角をなしている。

・テレビ塔建設とその経緯¹⁶⁾

a. 建設の経緯

昭和28年（1953）にNHK東京テレビジョン局が日本最初のテレビジョン放送を開始した後、札幌及びその周辺に向けての放送は同31年に始められた。テレビジョン放送局の開局は、東京、大阪、名古屋、広島、仙台、福岡に次ぐ7番目のものであった。その電波送信の役割を担うべく建設されたのが、札幌のランドマークの一つとして位置づけられるテレビ塔であり、同32年8月に完成を見た。

NHK（日本放送協会）は札幌において、昭和30年にテレビジョン放送局の建設計画を立てており、その際、すでに同29年に開業していた名古屋テレビ塔の例に倣い、展望塔を併設する形を関係各方面に提案し、立地場所を札幌市大通西一丁目に建設する案を示している。これを受けて、札幌市、商工会議所を始めとする関係諸機関の協議が進み、多目的利用が可能なテレビ塔建設へと向かっていった。そして、同30年に「テレビ塔建設世話人会」が発足し、運営会社の設立（現：北海道観光事業株式会社）が実現し、札幌市、日本放送協会の三者が出資・所有することが決定された。運営会社設立の趣意書には、テレビ放送への寄与とともに、教育・文化・科学・観光への利用が謳われている。その趣旨に沿って、テレビ放送施設はもとより、観光センター化するために、展望台、映画館、プラネタリウム、食堂、売店などが併設された。また、当初は札幌市の煤煙測定機器が設置され、その後、大気汚染総合監視装置や温度計・風向風速計が設置されるなど、大気・気象の観測所としての役割も担っている。完成したテレビ塔は鉄骨・鉄筋コンクリート造りで、塔体、塔屋、展望台等からなり、総高が147.2m、展望台は約90mの位置に設けられた。また、同33年に設立されたSTV（札幌テレビ放送）も、同34年にテレビ塔からの送信を開始した。

テレビ塔の建設は大通（公園）周辺の整備にも大きな役割を果たした。まず、中島公園にあったNHK放送会館が移転し、札幌市民会館が完成した。周辺の道路整備も進み、札幌の新名所とも言うべき空間が成立している。昭和46年には札幌地下街の完成と同時に、テレビ塔地下と地下街オーロラタウンが直結し、同51年には札幌地下鉄東西線の開通により、地下鉄コンコースが結ばれるなど、通勤・通学・観光への利便性がより一層向上し、当地が札幌中心部のシンボリックな空間として認知されることになった。また、大通西一丁目という位置は、ほぼ札幌市の条丁目の原点に相当し、空間的位置を明確に認識できる地点にテレビ塔が建設されたことは、当地域のシンボルゾーン化に大きな意味と役割を果たすことになった（第1表）。

b. テクノランドマークとシンボル

テレビ電波の送信及び複合観光施設として利用するために建設されたテレビ塔だが、建設から5年後の同37年に、テレビの普及に伴うサービスエリアの拡大に対応するため、NHKテレビの放送所はテレビ塔から札幌西方の手稲山（1024m）山頂へと移設された。同40年にはSTV放送のテレ

第1表 札幌テレビ塔建設の経緯とその後

昭和28年2月	日本放送協会わが国で初めてテレビ放送事業を開始
昭和30年10月	日本放送協会、札幌市にテレビ放送施設建設を計画 札幌市に申請
昭和31年6月	大通西一丁目にテレビ塔建設着工
昭和31年8月	電信電話公社、北海道にマイクロウェーブ完成
昭和31年12月	NHK札幌テレビジョン放送局が初めてテレビ電波を流す
昭和32年8月	テレビ塔竣工
昭和32年9月	「いつくしみの鐘」丸井デパート屋上よりテレビ塔展望台屋上へ移設
昭和34年4月	STV（札幌テレビ放送）、テレビ塔より電波を流す
昭和36年10月	電光時計設置、点灯される
昭和40年9月	NHKテレビアンテナをテレビ塔から手稲山頂送信所に移設
昭和44年1月	STV（札幌テレビ放送）、テレビアンテナをテレビ塔から手稲山頂に移設
昭和46年11月	札幌地下街オーロラタウンとテレビ塔地下西側が直結
昭和51年6月	テレビ塔地階ストア南側、地下鉄コンコースと直結

「札幌テレビ塔二十年史（昭和53年）」より抜粋

ピアンテナもNHKと同じように手稲山山頂へ移設された。テレビ塔は技術革新や社会の変化に翻弄されるテクノランドマークのもつ宿命が示され、当初の目的を失った。しかし、現在でもテレビの非常用予備施設、テレビ・ラジオの中継施設としての機能を保持しており、天気用リモコンカメラ、交通監視カメラ、温度計、風速計、PHSアンテナ、電波反射板など高塔の特性を活かす機器が取り付けられており、テクノランドマークとしての機能が全て失われた訳ではない。

複合的施設として建設されたテレビ塔は単なるテクノランドマークとしてではなく、多方面の機能を果たすことになる。その一つが電光時計の設置である。視認性の高いテレビ塔はそのデザインや色彩により、シンボリックなランドマークの代表例となったが、当初から時刻表示を求める声が上がっていた。それは昭和36年に実現するが、設置までには紆余曲折があった。民間企業各社との電光時計設置の交渉が進む中で、大通公園が風致地区であり、広告塔の設置が禁止されていることから設置が認められなかった。しかし、設置企業から公共施設として札幌市民へ寄贈する形をとることで当局からの許可が下りたのである。こうして、テレビ塔は時空間を認識可能なランドマークとして、又、札幌を代表するシンボルとしての地位を確立した。それは、ヨーロッパの中世都市に共通し、広場、教会、時計などが設置されるゲストハウスといった空間構成と類似する特性を想起させる。テレビ塔の近くには、札幌時計台がある。かつての札幌農学校の演武場であり、現在は札幌歴史館として利用されている。テレビ塔は現在を、時計台は過去からの時の経過を認識できる札幌のランドマークとなっている。

また、テレビ塔の持つ視覚的なランドマーク特性とともに、サウンドスケープの成立も確認され

空間的位置とランドマークの関係

る。昭和31年開催の札幌市婦人大会における議論から、「愛の鐘建設準備委員会」が設置され、募金活動によりデパートの屋上への仮設が実現した。テレビ塔の完成により、移設され、「いつくしみの鐘」と命名され、同49年まで毎日2度鳴らされた。20年近くに及ぶ鐘の音は、多くの人々に音風景として記憶されたものと考えられる。こうして、テレビ塔は本来の機能を失いつつも、時代の要請に対応しながらランドマークの役割を果たしてきたのである。

．空間的位置とランドマーク

a．大通（公園）の景観と機能の変遷

大通（公園）は開拓使設置に伴う街路・街区の設定に際し、幅58間（約105.4m）の広小路が設けられたことに始まる。北の官衙地区と南の商家地区との間に火防線としての目的をもったものとされている。明治44年に大通逍遙地として位置づけられるようになり、開拓記念碑、開拓長官黒田清隆像などが建立され、花壇・花園、遊歩道、運動場などが設けられた。かなりの面積と東西に帯状に展開する空間が都市構造上、ある種の空間軸・都市軸になったことは疑いない。その後、札幌市の管理下に入り、第2次大戦中は畑として利用されたり、戦後は進駐軍の野球場やテニスコートを始め、市民のスポーツ広場として利用された¹⁷⁾。テレビ塔建設時には幅105m、長さ1,500m（西一丁目～西十三丁目）緑地面積8.2haの公園として整備されている。

現在の大通（公園）は札幌の南北地区を認識可能な空間軸であり、各種のイベント（雪まつり、ライラックまつり、ホワイトイルミネーションなど）開催の場や野外ビアガーデン、とうきび売りなど季節の風物詩を感じ、楽しむ場として、又、市民や観光客等が集う憩いの場として位置づけられる。大通（公園）沿いの地下には地下街、地下鉄が設けられるなど東西連絡の場としても重要な位置を占めている。

このような空間形成を経た大通（公園）の東端に建設されたのがテレビ塔であり、大通（公園）を俯瞰する地点として景観認識に欠かすことができない存在となっている。大通（公園）とテレビ塔が景観の上で一体化し、相互の関係が造りあげられた。また、テレビ塔及びその周辺が保有する特性として、イベント等の開催の場としてふさわしい点を指摘することが出来る。すなわち、イベントの開催に当たっては、その内容はもちろん、会場の広さやアクセスの良さに加え、認知度の高い開催場所が求められる。それは、人々の待ち合わせの場が選択されることにも通じるが、場所（位置）の持つ認知度の高さがその背景にあることは言うまでもない。

b．空間的位置とランドマーク

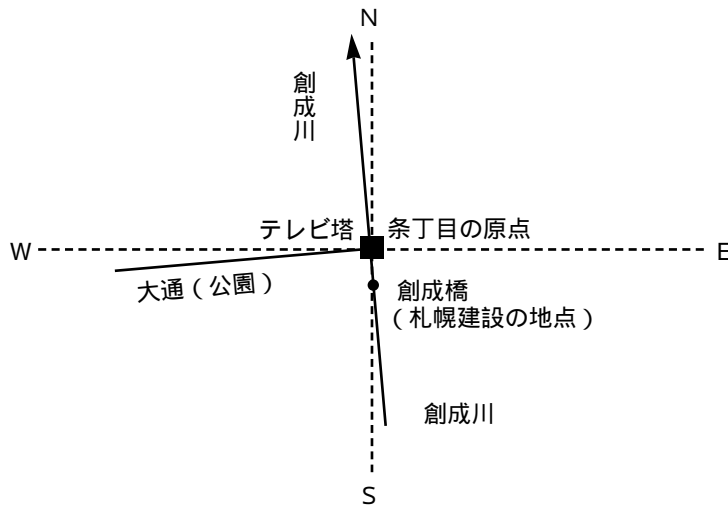
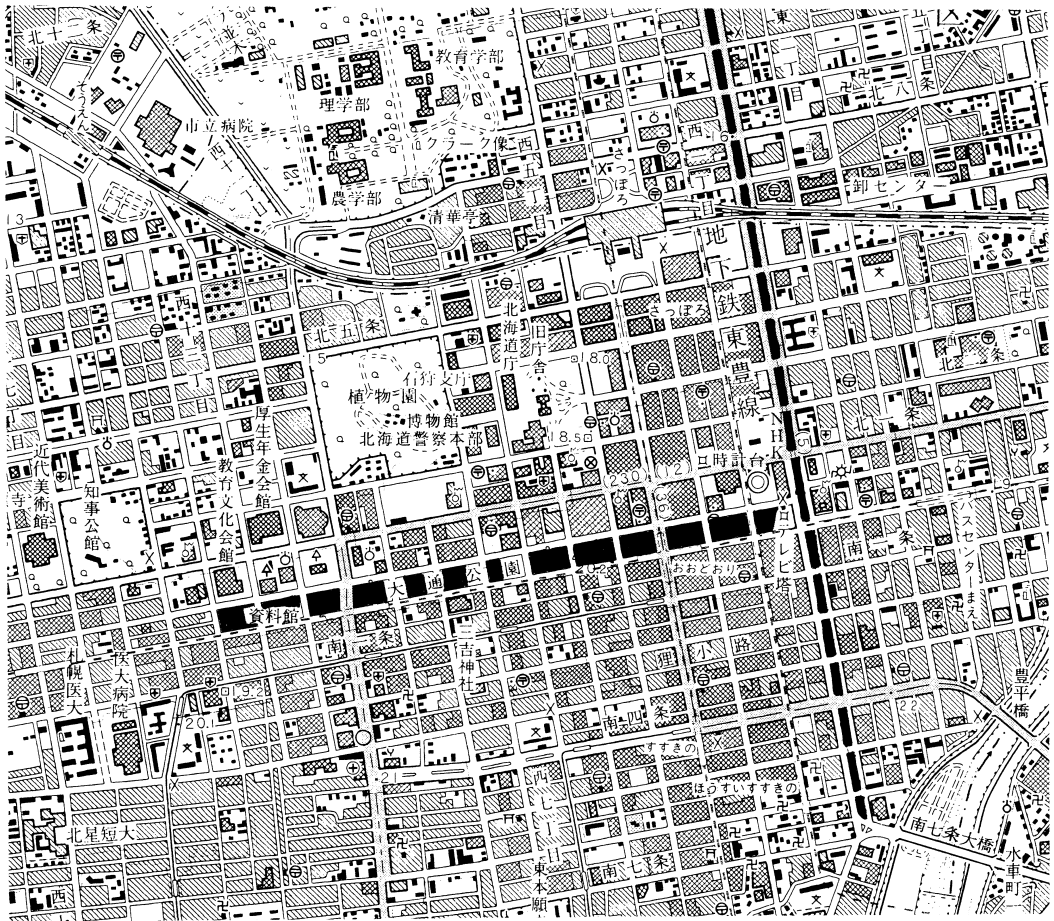
これまで述べてきたように、札幌の中心部の形成に当たっては規則的な街区・街路形成がなされ、時代の変化による街区・街路の重要度に変化が生じたものの、条丁目に基づく碁盤目状の区画の変更はなかった。また、札幌建設（創始）の地が現在の創成川と南一条にかかる創成橋であり、現在

の条丁目の基準となる地点（原点）との僅かな違いは認められるものの、区画自体のずれはない。さらに、街区の設定に際し、東西の基準を創成川（大友堀の一部を直線化）によって境したことで、街区全体が真北から約5°西に偏りながら南北方向の街区・街路が設定された。これは河川を境界線として利用したことによって、正確な四分方位とのずれを生じた訳だが、東西の街区・街路がその線に直交するように設定されたことで、空間座標の形成に影響はなかった。創成川は大友亀太郎が開削した大友堀を明治元年（1868）に資材・食料搬入路として延長したものである¹⁸⁾。河畔には市場なども多く成立し、経済的な動脈としての認識が高まっていったものと考えられる。人工的に直線化されたことは街区・街路の形成と相まって、河川のもつ断定性と線的な景観が人々の認知度をより一層高め、土地利用の分割線や境界線としての認識へと結びつき、条丁目設定に際しての東西地区分割線として採用されていったものと考えられる。

このような幾何学的な街区・街路設定に加え、札幌の中心部の形成にとって重要だったのは東西軸に大通（公園）が設定されたことである。かつて大通は分離帯（火防帯）として北の官衙地区、南の商家地区を分つ役割を担ったが、その後は都市公園としての体裁を整えていく。大通（公園）は札幌のシンボルゾーンとして、人々の空間認識軸となったのである。東西に延びるこの広がりを中心部における東西軸として位置づけられ、創成川と交差する。すなわち、大通（公園）と創成川の交点は札幌中心部における計画的な街区・街路形成の結果、必然的に生み出され、空間座標の原点となったのである。その結果、他都市には稀な、都市空間の中に座標点と座標軸を持つことになり、座標の原点が地理的位置としての普遍性を有することになった。このような地点こそ、ランドマークが配置される最適な地点となるのである。かつて、札幌の原風景を象徴するものとして、テレビ塔の東南の創成川沿いに消防局の望楼があった。東洋一の高さと言われ、古い札幌の写真集や絵葉書には必ずこの望楼が写っていたと言われる¹⁹⁾。火の見櫓的に札幌の中心から市街地を見渡すことのできる地点が立地選好されたものと考えられる。人々は札幌中心部の位置を望楼によって認識していたのであろう。

そして、このシンボリックな位置に建設されたのがテレビ塔であった。その建設場所は条丁目の原点とは一致しないが、ほぼ東西・南北の座標軸の原点（西一丁目）に位置している。高さ147.2mのテレビ塔はその電光時計とともに、札幌の時空間を認識可能なランドマークとして位置づけられることになったのである。その意味において、テレビ塔建設の位置を現在地に設定したことへの先見性を指摘することが出来る（第2図）。形あるランドマークはいずれ変化し、場合によっては消滅する可能性もある。しかし、何らかの意味が付加された地点に創出されたランドマークは、その再生が予見される。それは、空間的位置が明確化された地点に設けられたランドマークが、時間の経過に伴う機能の変化をも超越する可能性を内包するからに他ならない。

空間的位置とランドマークの関係



第2図 札幌の中心地区と空間座標
(国土地理院 1 : 25000地形図 (1999)「札幌」(拡大)に一部加筆)

．おわりに

都市の内部において、その中心地域や中心地区を景観的・機能的に把握することは難しい。それは、その都市固有の成立過程・歴史的背景が存在するためである。例えば、日本の城下町起源の都市などは、かつての城郭及びその周辺が中枢管理機能集積地になることが多く、人々が交流し接触する場として認知度の高い空間へと高まることにより、中心地域（地区）という認識が相対的に得られるようになる。それに対し、かつては城郭の周辺に位置づけられていた町屋が中心商業地区へと変化し、中心地区として認知される場合もある。言い換えれば、認識対象や認識主体に変化が生じるのである。これに対して、都市づくりが計画的・意図的に行われると、必然・偶然の違いはあるものの、何らかの意味が付加される場や地点が創出されることがある。本稿で取り上げた計画都市札幌は物理的・絶対的な中心（原点）を保有する都市なのである。札幌は計画的に街路・街区を方格状に区画する中で、座標面に東西軸を現大通（公園）南北軸を創成川に設定した。必然的に両軸の交点が導き出され、条丁目の設定がその座標上で行われた。その結果、人々は中心部における空間座標を得たのである。人々は条丁目の数字の大小と座標原点との位置関係を確認することで、現在地を容易に把握することが可能になった。物理的空間と人間の諸活動によって形成された地理的空間が一致する例は極めて稀だが、札幌中心部の街路・街区構成は、ほぼその条件を満たしている。

他方、人々の空間認識を支える景観要素の一つとしてランドマークが挙げられる。ランドマークは認識対象・認識主体の相違によって様々なものが存在するが、相対的に客観化されたランドマークは認知度の高い対象として位置づけられる。ランドマークの基本的な特性は地理的空間における自然的・人文的景観構成要素であり、象徴性・記号性・場所性・認知性などの諸特性によって支えられ、人々の空間的座標軸に象徴的に位置づけられる存在ということになるが、空間的な位置関係が明確化される場所性は絶対的位置と相対的位置によって規定される。中でも絶対的位置は物理的位置と言い換えることができ、ランドマークと認識者相互の物理的距離によって必然的に2次元・3次元の位置が設定される。このような位置が明確化されるランドマークの例は少ないが、札幌のテレビ塔がその代表例となった。テレビ塔の建設場所は札幌の空間的座標軸の原点とほぼ一致し、人々の時空間を認識可能なランドマークとして位置づけられるのである。

いずれにしても、何らかの意味が付加された空間的位置が成立すると、そこにランドマークが形成される理由が生じる。空間的位置とランドマークとの関係は密接なものであり、空間認識において重要な要素になる。このような位置に成立するランドマークは、地理的慣性に支えられて継続・保存されていくものと考えられる。言い換えれば、地理的空間に対して様々な要件が含まれる位置を明確化し、ランドマークとの関係を検討することは、景観形成を考える際、一定の役割を果たすことになる。

（つがわ やすお・本学地域政策学部助教授）

空間的位置とランドマークの関係

註

- 1) 津川康雄 『自然的ランドマークとその要件』、地域政策研究2-1・2、1999、117~131頁。
- 2) 津川康雄 『京都の観光要素』、立命館地理学5、1993、17~29頁。
- 3) リンチ(丹下健三・富田玲子訳) 『都市のイメージ』、岩波書店、1968、55~113頁。
- 4) 津川康雄 『地表空間におけるランドマークとその意義』、立命館地理学9、1997、17~29頁。
- 5) 津川康雄 『ランドマークの形成と地理的慣性 - 城郭を中心として -』、高崎経済大学論集39-3、1996、21~42頁。
- 6) 津川康雄 『宗教的ランドマークとその要件 - 大観音像を例として -』、立命館地理学10、1998、49~58頁。
- 7) 津川康雄 『宗教的ランドマークの成立過程 - 大観音像を例として -』、地域政策研究1-1、1998、87~101頁。
- 8) 山田 誠 『計画都市札幌(藤岡謙二郎編 地形図に歴史を読む 第四集 所収)』、大明堂、1971、104~105頁。
- 9) 山下克彦 『雪まつり発祥の計画都市「札幌」(山田安彦・山崎謹哉編 歴史の古い都市群・4 - 東北地方日本海側・北海道の都市 -)』、大明堂、1990、163~177頁。
- 10) 柏村一郎・山本博信 『札幌の地域構造の発達(木内信蔵・田辺健一編著 広域中心都市所収)』、古今書院、1971、97~120頁。
- 11) 蝦名賢造 『札幌市の都市形成と一極集中』、西田書店、2000、17~46頁。
- 12) 山口恵一郎編 『日本図誌体系 北海道・東北』、朝倉書店、1980、100~101頁。
- 13) 前掲9) 163~177頁。
- 14) 「札幌建設の地」の碑には、次の文が刻まれている。
「札幌建設の地 この地は 銭函から千歳に抜ける通と藻岩山麓を通り篠路に行く道路との交叉点に當り明治貳年拾壹月拾日開拓判官島義勇石狩大府の建設をこの地から始め その志をついだ岩村判官は同四年參月札幌の町割をこゝを中心として行い 民家を建てることを許した 今日札幌市はこの附近を基点として發達したのである」
- 15) 前掲8) 104~105頁。
- 16) 北海道観光事業(株)編 『札幌テレビ塔二十年史』、1978、全115頁。
- 17) 朝倉 賢 『札幌 街並み今・昔』、北海道新聞社編、2000、24~31頁。
- 18) 「札幌開拓の先駆者・大友亀太郎は天保五年(1834)に現在の神奈川小田原市で生れた。二宮尊徳の門に学び「人の一生は金銀財宝に富めるにあらず、積善の道に如かず」を信念とした。安政五年(1858)に渡道し、慶応二年(1866)には箱館奉行に蝦夷地開墾の計畫書を提出するとともに石狩地方開拓の命を受け、札幌市東区(旧・元村)に土地を選んで開墾し、札幌の街づくりの発端となった。明治二年(1869)これを開拓使に引き継ぎ、翌三年札幌を去った。亀太郎が掘った大友堀は、今日の創成川の基となって街の中心部を流れ続けている。」大友亀太郎像(碑文より)
- 19) 前掲17) 28~29頁。

付記) この研究をまとめるにあたり、1999年度高崎経済大学特別研究奨励金『都市空間におけるランドマークの諸要件に関する地理学的研究(研究代表者 津川康雄)』の一部を使用した。なお、資料収集にあたり、札幌市教育委員会文化資料室の工藤一廣先生、北海道観光事業株式会社の西尾光弘様にご配慮をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。